# 全海運所属組合の横顔 連載 第12回 四国地方海運組合連合会

## その3 徳島県内航海運組合

#### 【組合の概要】

事 務 局 〒 770-0873

徳島県徳島市東沖洲 2-14

沖洲マリンターミナルビル1階 電話 088-664-4570 FAX 088-664-4571

IR『徳島』駅から車で10分

理 事 長 沖野 雅信 沖野海運㈱代表取締役社長

事務局長 川﨑 福重

事務局員数 男性 1名 (事務局長含む)、女性1名

組合員数 運送事業者 10社

73 社 (休業除く) 貸渡事業者

利用運送業者 3社

合 計 86 社

貨物船 113隻 193,397 重量トン 所属船腹量

油 送 船 24 隻 24.996 ㎡

137 隻 218.393 重量 いパ 合 計



事務局のある徳島市東沖洲 (Yahoo! map)

## 阿波水軍と徳島の産業

#### 【海運の発祥】

徳島県は古代、吉野川の北方地域が栗の生産地だった ため粟国、南方地域が那賀川を命名の起源として長国と 呼ばれ、それぞれを国造が治めていた。国造とは神武天 皇が東征の論功行賞として、豪族を首長に任命したもの であった。長国は13代の成務天皇の頃、阿波国はその 徳島県内航海運組合が入居する沖洲マ 後の15代の応神天皇の頃に成立したとされているが、



リンターミナルビル

長国は航海や漁労に活躍し、4世紀以降は海上輸送で力を蓄えた海人族が支配していたと されている。

平安時代の神道資料『古語拾遺』によれば、神武天皇が東征に際して忌部氏を率いて材 木を採取し、天富命が奈良盆地南部の畝傍山の麓に橿原神宮を造営するとともに肥沃な土 地を求め開拓し、穀や麻種を植えたという。のちの律令制では長国造の領域を含め令制国 としての粟国が成立した。和銅6年(713)、元明天皇による好字令で、地名を2字で表記 したため、「粟」は「阿波」に変更されたときれている。

平氏政権下では、阿波国府を足場にした阿波民部大夫成良が勢力を持ち、阿波の水軍を 率いて瀬戸内海で活躍。平清盛の命で摂津大輪田泊(現神戸市)に拠点を築き、源平の争乱が 起きると伊予の河野氏を攻めるなど、平氏方の勢力となっ た。成良は寿永2年(1183)、都落ちした平氏を讃岐の屋島 に迎えたが、子が源義経に捕らえられたことから平氏を裏 切り、平氏が壇の浦で滅びる一因を作ったとされている。

阿波の水軍といえば、その長である森家始祖の佐田九 郎兵衛は、印旛国 (現鳥取県東部) 出身で、阿波国佐田館 (現 徳島市国府町) で細川氏、三好氏に仕えて土佐泊 (現鳴門市 鳴門町) 城主を務めた。佐田氏の後継者の元村は、長宗我 部元親の阿波侵入に抵抗し、土佐泊城を守り通したこと 事務局。川崎事務局長(右)と事務局員 で知られ、蜂須賀家政の阿波入国で配下に加わった。



の小松則子さん

元村の子の村春が率いた阿波水軍は、豊臣秀吉の四国攻めに功を 上げ、朝鮮の役や秀吉亡きあとの大坂冬の陣や夏の陣での功績など、 徳川家が幕藩体制を確立する過程で、重要な役割を果たした。村重 は村春の弟村吉の長子で、村春の養子となったが、村春に後継の忠 村が生まれたことから分家して森甚五兵衛と称し、蜂須賀家政より 福井村 (現阿南市) の一部と板東郡を分知した。

「森甚五兵衛」は、森家当主が代々襲名する姓名で、森家は豊臣 秀吉が天正 18年 (1590) に天下統一する以前から阿波水軍の長であ り、蜂須賀家の阿波入国以前から徳島藩の水軍を率いて来た。

森家は、蜂須賀家支配下の徳島藩にあって、中老職を務めた。鎖 国政策により各藩が水軍を弱体化させる中で、徳島藩は参勤交代に



事務局入口

必要なため、阿波水軍に藩の海上方として造船、管理、運用、乗船の訓練を委ね、参勤交 代の役職を明治維新まで世襲した。

また、16代目森甚五兵衛村晟は明治維新の際、戊辰戦争に官軍側に家臣団を連れて従 軍し、各地を転戦したが、戦死して弟の村興が相続し海上方を命じられ、藩の軍艦『戊辰丸』 で宮古湾海戦に参戦し、明治2年(1869)の藩政改革により海上方を辞任するまで務めた。

昭和10年(1935)刊行の『徳島縣木頭の林業』に「長国は今の那賀海部の両郡を言ひ 元は那賀一郡、なりしと言ふも寿永以前(1182~1185/平安後期)に二郡と分れたり。海部 郷と大由郷の二となす」とある。大由郷は那賀川流域で、当時はこの地域から近畿へ向け て木材が運ばれていたことがわかる。

江戸時代は、幕府または諸藩が直轄して収益をあげる官有林のことを御林と称した。御 林にはいくつかの区分があり、定請林は年々運上金上納等により年季を限って樹木秣採 取を藩が許可した山林。取山は藩が木材売人に永代請所として貸下げた山林または、村が 管理し収益を得る林野として、村民が秣肥草を採取する山林。稼山は百姓が家業のために 用材、薪炭を採取する山林だった。個人が管理し収益を得るものとしては、個人が用材、 薪炭林を伐採出来る検地名、負山(百姓持山林)の他、冥加銀を納めて御林に伐畑を開墾す る伐畑山があった。御林内には御止木が定められていた。その樹種、樹名については文献 により違いがあるが、これらの中で決められた樹種の伐採が禁止され、雑木などの伐採だ

#### 徳島県海運組合所属事業者と船腹量

令和2年10月1日現在/休業除く

全国海運組合連合会

区 分		事業者数	貨物船		油送船		曳船		台船		バージ		プッシャー		合 計	
			隻数	重量トン	隻数	m³	隻数	PS	隻数	重量な	隻数	重量トン	隻数	重量り	隻数	重量♭√m³PS
	登録運送業	11	13	17, 429	0	0	0	0	0	0	7	30, 148	7	3, 683	27	51, 260
	届出運送業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	計	11	13	17, 429	0	0	0	0	0	0	7	30, 148	7	3, 683	27	51, 260
貸渡業	登録貸渡業	80	87	138, 165	22	363, 310	0	0	0	0	1	1,812	1	188	111	503, 475
	届出貸渡業	1	0	0	1	352	0	0	0	0	0	0	0	0	1	352
	計	81	87	138, 165	23	363, 662	0	0	0	0	1	1,812	1	188	112	503, 827
利用運送業		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合 計		95	100	155, 594	23	363, 662	0	0	0	0	8	31, 960	8	3, 871	139	555, 087

けが許された。当時、徳島藩には阿波水軍があり、全国屈指の海軍力を誇っていたが、これら藩直轄材木の輸送力でもあったという。

徳島県史に次の記述がある。

「大阪冬の陣で中国九州の大名が秀頼軍を援けえなかったのは、阿波の水軍が明石と由良の海峡を遮断していたことによるし、また、平家一門が瀬戸内海の海上権を握っていたために源氏が苦戦したのに対し、家康は源氏の二の舞を演じなかったのも、阿波水軍の威力にあることから、徳川幕府における蜂須賀家重視の理由の中には、阿波の水軍の実力ということが重要な要素でもあるので、蜂須賀家は海上方を特別に優遇した。…(略)…特に造船のためには、安宅御用木として5カ年毎に藩有林の大木を明細に報告せしめ、藩の計画によって造船用材として伐採した」

城下の安宅は軍港で、大勢の船頭や加子が住んでいた。 寛永 18年 (1641) に 「安宅御有船」

(藩主所有軍艦) は 206 艘あったという。船大工達が造船の木屑を貰い受けて建具、鏡台、下駄、塵取りなどを内職として作り始めたのが、その後の徳島木工家具業の始まりと言われている。

室町時代中期の文書『兵庫北関入船納帳』は、文安2年(1445)の1年間に兵庫北関(現神戸港付近)にあった関所に入った船の記録をまとめたもの。土佐泊(現鳴門市)、武屋(現鳴門市撫養)、別宮(現徳島市)、惣寺院(現海部郡)、平島(現阿南市)、橘(現阿南市)、牟木(牟岐/現海部郡)、海部、宍喰(現海部郡)などが阿波国の港として出て来る。阿波



徳島県内航海運組合の支部所在地(Google map)

の船総数 122 艘のうち、海部船籍のものが 56 艘と群を抜いて多く、阿波国南部の海運の 盛況がうかがえる。阿波船が畿内方面に運んだ積荷は材木、穀物、海産物、藍、胡麻など であったが、量的に多いのは木材であった。このことからこの時代、阿波国南部が木材の 産地だったことがわかる。

江戸時代の阿波国はまた、藍作が主要な産業だった。木綿が急速に広まったことから、木綿の染料である藍の需要も高まったが、吉野川が生み出した肥沃な平野で生産された阿波の藍は品質に優れていたため、江戸や大坂を始めとして全国に販売され、徳島藩は藍の専売制を敷いた。藩はその他にも塩を専売品にし、砂糖や煙草も阿波の主要な産業だった。

## 四海連一の船どころ

#### 【支部の特色】

徳島県は、四国4県の中で大阪、神戸に一番近い。かつては徳島〜阪神を中心に雑貨、木材、化学薬品、砂利などの海上輸送が盛んであったが、昭和40年代の後半頃から下火になり、現在では徳島県から大阪に移出する物資が大幅に減っている。そのため、徳島県内航海運組合の船主の大半は阪神地区、京浜地区のオペレーターが用船先となって運航されており、地元の貨物とは無縁になっている。

徳島県内航海運組合は、昭和61年(1986)4月、運輸省の内航海運構造改善指針に基づき、 県下の地区組合を統合して誕生した。ここで徳島県の内航業界と船どころ事情に触れてお

こう。徳島県下の船どころは徳島市、鳴門市、小松島市、阿南市の4市である。徳島県では古くから名産の藍染めや吉野川、那賀川畔の杉、檜などの木材、野菜類、海産物などを阪神地区に送っていたが、昭和40年代前半まではそれが続いて来た。つまり、県下の船主は地元の1次産業の輸送手段として誕生し、基盤を築いて来たわけだが、これは反面、船主の近代化を遅らせる

徳島県内航海運組合の支部別事業者数

令和2年11月12日現在 全国海運組合連合会調べ										
支 部	社数	運油	送業	貸犯	利用					
文 司	仁教	登録	届出	登録	届出	運送業				
徳島支部	15	1	0	11	0	3				
徳島内航船支部	1	0	0	1	0	0				
小松島支部	25	0	0	24	1	0				
阿南支部	16	0	0	16	0	0				
阿南内航支部	10	0	0	10	0	0				
鳴門支部	19	9	0	10	0	0				
合 計	86	10	0	72	1	3				

結果ともなった。徳島県下では、鋼船化の活発になったのが昭和40年代に入ってからと、他地区に大きく遅れをとっている。その上、昭和40年(1965)前後に徳島を拠点とするフェリーが続々と現れ、地元の荷物を奪われる憂き目に遭い、県下の船主は県外に生活の糧を求めざるを得なくなり、それが鋼船化につながったとされている。折から内航2法が施行され、総連合会による船腹調整事業がスタートした後であり、地元船主の多くは有力オペレーターとの接点を持つのにも苦労している。



鳴門海峡

徳島県下でもうひとつの古くからの貨物は骨材。戦前から吉野川の河口で海砂・海砂利が採取されていたが、昭和39年(1964)の東京オリンピック需要をピークとする建築ブームで、昭和30年代後半からその需要が急増し、昭和45年(1970)の大阪万国博覧会の建設で需要はさらに拡大した。しかし、石油危機後の総需要抑制策で土木建築は下火となり、あまりの乱獲振りに海洋資源保護をからめて、瀬戸内海の府県が骨材の採取禁止令を出したことから、砂利船の需要は激減している。

徳島県下では、こうした歩みを背景に9つの地区海運組合が設置されていた。徳島市内の徳島地区海運組合と関西砂利徳島地区海運組合。小松島市内の徳島内航船海運組合と小松島地区海運組合。阿南市内の徳島県南部地区海運組合、阿南地区海運組合、富岡港海運組合、阿南内航海運組合。鳴門市内の鳴門地区海運組合である。これらを統合する組織として徳島県海運組合連合会(県連)が置かれ、四国地方海運組合連合会を経て全海連につながっていた。

県下地区組合の一本化は昭和 40 年代後半に、この県連を軸に計画されたが、当初は県連の下にオペレーター、オーナーの縦割組合を設置しようとしていた。しかし、県下には元々オペレーターが少なく、しかも 3 号、4 号の小規模オペが主体で、オーナーの勢いに押されて組合を縦割にすると、オペレーターにとっては不便になるという声があった。

このしこりが解消されないまま、構造改善の期限(昭和61年3月31日)を迎えようとしていたことから、富岡港海運組合の所属業者と関西砂利徳島地区海運組合、徳島県南部海運組合の約半数の組合員が反発して県連を脱退。55社、56隻、54,066重量 かが全内船に大挙加盟して同組合の徳島支部を設置。残った230社、227隻、188,504重量 なは縦割2組合とせずに県下一本の「徳島県内航海運組合」に統合され、従来の徳島、徳島内航船、小松島、阿南、阿南内航、鳴門の各地区組合は支部となった。

以下は各支部の特長である。

#### 【徳島支部】

〒 770-0873 徳島県徳島市東沖洲 2-14

TEL 088-664-4775 FAX 088-664-4571

支 部 長 渡辺 慶太 三洋汽船(株)代表取締役社長

事務局 小松 則子

徳島県海運組合と同居しており、事務局も兼務。徳島港は、県内生産物及び県民生活必需物資の半数を占める集散地として重要な地位にある。徳島支部の母体となった徳島地区海運組合は、その徳島港を基地にした海運業者と周辺地区の回漕店を中心に昭和32年(1957)12月に発足した。そのため、現在でも運送業、取扱業は港湾運送業や倉庫業を兼業者している。

徳島市は元々蜂須賀家の城下町で、明治中期までは四国随一の町といわれていたが、藍染めを中心とした繊維や木竹細工などの手工業しか育たず、近代工業化に遅れていた。近年、新産業指定都市の指定を受け、那賀川の電源開発が進められたのを始め化学、造船、機械工業が活発になって来た。

しかし、徳島と阪神、和歌山を結ぶフェリーが就航したことから貨物が奪われ、また、

河川砂利の採取規制も地元海運業者に大きな打撃を与え、 船主は小型船による地元貨物中心から、大型船化により 京浜、阪神地区へ用船先を求めて行った。地元オペレー ターの取り扱い貨物は雑貨、化学薬品、化成品、海砂な どである。

#### 【徳島内航船支部】

〒 779-1401 徳島県阿南市内原町養松 15-1 TEL 0884-49-4890 FAX 0884-49-4891

支部 長 撫中 大輔 末廣海運㈱代表取締役



徳島小松島港(写真提供:Photo Library)

徳島内航船支部は、内航海運組合法に基づき昭和39年(1964)11月、徳島内航船海運組合として設立されているが、旧組合員の大半が昭和61年(1986)4月の新組合発足時に全内船に鞍替えし、残った組合員と船腹量で支部を構成したため、徳島県下では最も規模の小さい支部となっている。

同支部の組合員は元々、帆船時代から地元の木材チップ、砕石などを阪神、中国地方に輸送して来たが、昭和 36 年 (1961) 頃からの鋼船化により鋼材、雑貨、セメント、石油製品などの輸送に転じた。最盛期は昭和 38 ~ 39 年 (1963 ~ 1964) 頃で、地元に約 60 隻の船舶があった。

現在は組合員が少ないため、支部事務局は撫中支部長の会社に置き、事務局の仕事も委ねている。

#### 【小松島支部】

〒 773-0001 徳島県小松島市小松島町字新港 19-11

TEL 0885-32-3101 FAX 0885-32-3202

支 部 長 沖野 雅信 沖野海運㈱代表取締役社長

事務局 豊実 節子

森口 美穂

地元海運業者は大正初期から帆船により阪神向け雑貨、木材、鉄材などを輸送していた。 戦時中は機帆船で軍需物資の輸送に従事し、戦後は生活必需物資や戦災復興のための建設 資材の輸送にあたり、昭和30年(1955)頃からの鋼船化後も阪神向けにチップ、木材、ス クラップ、雑貨を輸送し、現在にもこれ引き継いでいる。また、小松島港は昭和23年(1948) に貿易港に指定され、以後は港湾整備の進展で大型船の出入港も盛んとなり、物資交流の 拠点としても発展して地元にも潤いを与えた。

所属組合員は全社貸渡業。京浜、阪神地区の運送業者に所属している。徳島県内航海運組合の支部の中では所属組合員、船腹量とも最大。小松島支部の母体となった小松島地区海運組合は、昭和38年(1963)11月の設立。

#### 【阿南支部】

〒 774-0005 徳島県阿南市向原町下ノ浜 1-7

TEL 0884-22-2707 FAX 0884-22-2708

支 部 長 品川 照 阿波海運衛代表取締役

事務局 須賀 恵美

阿南支部の母体となった阿南地区海運組合の設立は昭和38年(1963)2月だが、その前身は大正初期に地元の帆船船主によって設立された冨岡港通船組合(任意団体)であり、船どころとしての歴史は古い。

地元の船主は古くから吉野川、那賀川の河口で採取した砂利を阪神向けに輸送したり、 九州から阪神、京浜向けに石炭や木材を輸送して来た。特に高度経済成長期の砂利輸送が 盛んな頃には、同組合が採取権を取っていたほどだが、昭和48年(1973)の石油危機と海 洋汚染問題を契機に砂利採取が規制され、地元船主の転廃業も続出した。現在、地元船主 の大部分は阪神、中京、京浜地区の運送業者に所属している。所属組合員は全社登録貸渡業で、所属船腹は全船貨物船。

#### 【阿南内航支部】

〒 774-0004 徳島県阿南市福村町南筋 102

TEL 0884-22-0865 FAX 0884-22-4089

支 部 長 村田 泰 八重川海運㈱代表取締役

事務局長 杉本 裕之

阿南内航支部の母体となった阿南内航海運組合は、昭和39年(1964)7月設立。地元の船主は古くから吉野川、那賀川の河口で採取した砂利を阪神向けに輸送して来たが、昭和48年(1973)の石油危機と海洋汚染問題を契機に砂利採取が規制され、地元船主の大多数は休眠状態に陥る一時期があった。その後、船主が積極的に県外オペレーターの開拓に努めた結果、阪神、京浜地区の運送業者に所属し、鋼材輸送に従事する船が増え、勢力を盛り返した。所属組合員は全社登録貸渡業で、所属船腹は貨物船が8隻、油送船が1隻だが、油送船は6,000㎡型の大型船。

村田支部長は全海連副会長、四海連会長も務めている。事務局は、旧阿南内航海運組合時代に井村汽船の中に置かれたが、支部となった現在も引き継がれている。

#### 【鳴門支部】

〒772-0012 徳島県鳴門市撫養町小桑島字前組番外 1-5

TEL 088-685-6360 FAX 088-685-8579

支 部 長 橋本 勝仁 大洋海運衛代表取締役

事務局長 平野 治生

職 員 中村 智子

地元の撫養町は、昔から斉田塩で発展した町であり、これを京浜方面まで輸送し、復荷 に石炭を扱ったのが海運のルーツである。

昭和40年(1969)以降は、吉野川河口で採取される砂利を阪神方面に運ぶ砂利船が主力となったが、昭和48年(1973)施行の吉野川河口の砂利採取規制で、現在は岡山、高松沖で採取した砂利を阪神方面に運ぶのが主力となっている。

一般貨物船は主に京浜、阪神のオペレーターに用船されている。母体となった鳴門地区海運組合は昭和38年(1963)8月、撫養、鳴門、瀬戸地区の船主で構成されていた任意団体の鳴門市船主組合を発展的解消して設立された。

#### 【徳島県内航海運組合青年部の活動】

四海連青年部の活動は活発だが、最大多数党である徳島県内航海運組合がその中心的存在となっている。令和2年(2020)度はコロナウィルス禍で満足な活動が出来なかったが、徳島県内航海運組合青年部の令和元年(2019)度の活動は次の通り。

- ◇令和元年 6 月 21 日……四国運輸局主催により県内の神例造船所で徳島科学技術高等学校 生約 27 人が参加し、造船所見学会・造船所と内航海運業の説明会開催。
- ◇令和元年 6 月 25 日……広島商船高等専門学校の練習船『広島丸』が徳島小松島港に初寄港。徳島県県土整備部のご協力を得て、乗船中の学生に本県海運業の PR 活動を実施。
- ◇令和元年7月14日……徳島駅クレメントプラザ5Fで、若年者就職マッチングフェアに参加。徳島労働局のご協力で2020年3月大学等卒業予定就職希望者、2019年3月大学等卒業未就職者、45歳未満の若年者を対象に内航海運をPR。
- ◇令和元年7月14日……小松島支部で「小松島みなと祭」に合わせ、幼・小学生を対象に イベント実施。海の仕事を知ってもらい地域への貢献活動。
- ◇令和元年8月1日……上板中学校で「職場体験に向けて先輩の話を聞こう」と題し2年

生87名の生徒に「海運の仕事」について講演。

◇令和元年8月25日……徳島県県土整備部ご協力を得て、徳島市沖洲マリンターミナルで、 「みなとサマースクール 2019 | 開催。小中学生を対象に「うみのおしごと | PR 活動。

◇平成元年9月6日……弓削商船高等専門学校から講師派遣で、阿南市立桑野小4~6年生、 小松島市立千代小5年生、北小松島小4~6年生に出前授業「私たちの生活と船」開催。

◇令和元年9月10日・11日……上記3校と勝浦町立勝 浦中1~2年生に、徳島県県土整備部の協力得て、弓削 商船高等専門学校練習船「弓削丸」乗船体験会実施

◇令和元年 9 月 18 日……アイドルグループ「STU48」の 船舶が小松島港に寄港し小松島市長をはじめ、徳島運輸 支局等の関係団体が出席し、青年部からも出席。

**◇令和元年 10 月 30 日……徳島駅クレメントプラザでジュ** ニアマッチングフェアに参加。徳島労働局の協力で高校生 令和元年9月、弓削商船高等専門学校 を対象に内航海運の PR 活動。



練習船で小中学校生の体験乗船会開催

◇令和元年 11 月 9 日……弓削商船高等専門学校 「商船祭」 に徳島県県土整備部の協力得て、 内航海運業 PR ブースを設置し海運業ガイド、内航海運 PR 用冊子、クリアファイル等配 布し内航海運の PR

◇令和元年 11 月 1 日……徳島グランヴィリオホテルで全海運青年経営者意見交換会開催。 四海連よりオブザーバーを含め23名が参加で総勢78名出席。「内航船員定着のための働き 方改革」等テーマに意見交換。全海運内航海運活性化プロジェクトチームと意見交換会も。 ◇令和元年 12 月 1 日……沖洲マリンターミナルで徳島県運輸政策課、船舶職員養成協会 の協力得て、県内の中学生対象に徳島県立徳島科学技術高等学校実習船『阿州丸』乗船体 験会開催。航海機器説明なども実施。徳島県漁業取締船『つるぎ』見学、徳島科学技術高 校の紹介等も実施。記念品に海技免状のレプリカ、集合写真贈呈

◇令和2年1月29日……徳島県立徳島科学技術高等学校生徒に、内航海運への理解を深め、 内航船員就業について考えてもらうための意見交換会実施。

## 【海にまつわる神社】

### 大麻比古神社

徳島県の海運関係者が海の守護神として崇拝するのは、鳴門市にある大麻比古神社であ る。県内では「おおあささん」「おおあさはん」と親しみを込めて呼ばれていおり、県民の 身近な存在として古くから崇拝され、県内一の大社として有名な神社。

御祭神は大麻比古大神と猿田彦大神の二柱。天太玉命の神孫である天富命は勅命を受け、 肥沃の地を求め阿波国に到り、この地で麻植を播種し麻布木綿を精製した。その由緒により、

阿波地方の殖産産業の祖神として、天太玉命が大 麻比古大神として奉斎された。大麻比古神社は阿 波・淡路両国の総氏神として、また阿波国一宮と して古くから崇敬されて来た。

太玉は「立派な玉」を意味し、祭に用いる神聖 な玉に由来する神名である。天太玉命は、天岩戸 神話の中に登場する神で、古代朝廷の祭祀を担っ た忌部氏の祖神でもある。『古事記』によれば、 天岩戸に籠った天照大神を引き出すために、神々



大麻比古神社本宮 (左) と海上安全の御守護札

が神事を催した際、神への供物の御幣を捧げたとされている。

また、猿田彦大神は昔、大麻山の峯に鎮まり座したが、後世に至り合祀されたと伝えられる。天孫降臨を啓行(先導)された猿田彦大神は、高千穂に瓊瓊杵尊を案内した後、天宇受賣命と共に本拠地である「伊勢の狭長田五十鈴の川上」の地に戻ったが、阿波の国を始め全国の開拓にあたったとされている。

大麻比古大神とは、大昔阿波国を開拓した阿波の忌部氏の祖先の神。神武天皇の代に忌部氏の子孫が阿波国に入り、国土を開拓して麻や楮の種を播いて麻布や木綿を作り、郷土の産業の基を開いて人々の福利を進めた。

その氏族は麻植郡 (現吉野川市) を拠点として開拓し、のちに先祖の天日鷲命を祀った。 この神社がは、徳島市に忌部神社として祀られ、ご神徳を讃えて麻植の神とされている。

【参考文献】「阿波の歴史と文化」(阿波の歴史と文化刊行会)、「阿波歴史文化道」(歴史・文化道推進協議会事務局)、「徳島の歴史」(徳島県立図書館)

#### 【取材こぼれ話】

#### ドイツ橋とめがね橋

大麻比古神社の境内を流れる小川の板東谷川に、小さな石製のアーチ橋が架かっている。日本百名橋の徳島88景に選定された「ドイツ橋」である。第1次世界大戦でドイツの租借地だった青島で捕虜となり、大麻比古神社の約2km南にあった板東俘虜収容所に収監された953人のドイツ兵達が築造したもの。

当時、大麻比古神社境内はドイツ人捕虜達の散策に利用されていたが、板東俘虜収容所での捕虜への対応が人道的かつ寛大で友好的である上、地域住民との交流も積極的だったことから、地元住民との間に国境を越えた人間愛と友情が芽生え、高い水準のドイツ文化がこの地に伝えられた。バターやチーズの製法、博覧会の開催、楽団による演奏会など、地元の発展に大きく貢献したのがにった。彼らが帰国する際に母国の土木技術を生かし、付近で採取出来る撫養岩(和泉砂岩)を使って記念に残したのがドイツ橋だった。大正8年(1919)4月初旬に着工し、同年6月末に完工したアーチ形式の橋で、重さは195<sup>ト</sup>ンになるという。平成16年(2004)1月に徳島県の文化財史跡に指定され、現在は保存のために橋の上が通行出来なくなっいる。

神社の境内にはこれとは別に、ドイツ人捕虜達が造成した池があり、この池にも捕虜達の建造した小さな石造りの2連アーチ橋の「めがね橋」が架かっている。こちらは通行が可能である。(米山)



ドイツ橋 (上) とメガネ橋